うが思い出させてくれます。戦後処理も来年をメドに行われるようですが、我々六十万余りの者が戦後において抑留され、強制労働を強いられ、一割の戦友が彼の地で亡くなったことは永久に記録されるべきだと思います。私は通常一人でいるとき、「異国の丘」を口ずさみ、また「岸壁の母」の歌を聞くにつけ涙がとまらず、六人兄弟のうち私が一番帰国がおくれたため、今は亡き父母の想いを考えるとたまらない気持ちになります。子を持つ親となった者の心情でしょうか。永久に平和が続くことを祈るばかりです。

## 思い出

高知県　廣瀬健市

私が北陵に収容されたのは八月二十二日前後だったと思います。私たち第六三師団は、元北京防衛師団で、八路軍相手に小競り合いを繰り返しておりました。私の所属する野戦病院は、第六三師団編成時に北京防衛旅団を師団編成するときの要員として、第三五師団＝開封郷一帯＝黄河北岸に布陣＝の第二野戦病院でしたが、昭和十八年四月、五月の、十八年春新太行作戦に出動、八路軍を叩いた後、六月、第六三師団に転属、北京周辺の保定に野戦病院は開設されました。そして第六三師団特別訓練隊に勤務派遣を命ぜられ、八路軍と常ににらみ合いながら勤務し、昭和二十年六月、満州北西部の通遼に陣地を構え、友軍三個師団と共に、敵九個師団と対峙（たいじ）しておりました。

八月開戦と同時に、敵の侵攻を防ぎつつ奉天に後退、最後の決戦を行うつもりだったところ、八月十五日終戦、数日後、北陵収容所に入り武装解除になりました。

昭和二十年十一月七日ごろに、私は労働大隊要員として原隊に別れ、第五五労働大隊（第五九労大であったかもしれません）と共に行動したのです。このときの編成は千五百名として、軍医は五百名につき一名ということで計三名が付きました。約二週間の貨車輸送の後、ハラグンに下車しました。この千五百名の大隊のうち、到着の夜、千名は私たち五百名よりずっと奥

地に進んで行き、本部もここに置かれ、私たち五百名は手前で野宿、毛布でそれぞれ囲い、たき火をして過ごし、翌朝煙で目を真っ赤にして、ルーマニアの捕虜が出た直後、私たちが小屋に入りました。私たちが下車した場所に重い荷物（行李など）を残して不寝番を数人つけておきましたので、取りに行きましたところ、行李などすべて開けられ、中の物が引っ張り出され、目ぼしい物は持ち去られていました。不寝番によると、私たちが昨夜去った後ソ連兵が来て、このように開けて目ぼしい物を持ち去ったとのこと、茫然としました。不寝番もどうすることもできなかったそうですが、口惜しくてたまりませんでした。

私たち五百名は陸軍病院、野戦病院の兵士が多く、それに「満飛」の航空隊の方々が大半を占めていたように思います。私たちは本部要員として甘粕中尉と私、及び歯科医見習士官、数名の下士官、通訳の軍属並びに当番兵が一つ小屋に入りました。

十二月中旬ころからにわかに給与が悪くなり、例のとおり重湯だけとなり、びっくりして隊長とソ連側に交渉しましたが、ソ連側は「お前たちが食糧を持ってこなかったからだ」の一点張りで、ノレンに腕押しの状態で、てんで話になりません。私どもは入ソ時、陸軍給与令による食糧及び消耗品等三カ月分を積んできたのでしたが……。

翌年、私が大隊本部（千名の方）に行く機会がありました。糧秣倉庫は千名組の方にありましたので、そこから五百名組の方にトラックで運搬していましたが、帰りにそのトラックに便乗したところ、途中まで来たところ急に停車し、付近から来て待っていた部落民に、かなりの量の糧秣をトラックよりほうり投げておるのを見届けました。口惜しくて仕方がありませんでした。

そして、翌二十一年一月半ばから栄養失調者が続出するようになり、死者が出始めて、私も施す術もありませんでした。私自身も一月末に高熱を出し、身動きもできなくなりましたが、幸いにもソ連ドクターの下給品の少量のビスケットの差し入れがあってから、今まで食欲など皆無だったのがこれをきっかけに急に食欲が出始め、一命を取りとめました。このとき、千名

組の方から青木軍医が応援に来てくれましたが、私が治ると同時に今度は青木軍医が寝込んでしまい、発熱が続いていましたが、急に鬼籍に入りました。私のために来られて死亡され、すこぶる残念で何とも言葉がありませんでした。

かくして五百人中、約百人余が死亡しました（昭和二十一年一月から五月まで）。この人たちは、小屋の裏の小山に埋葬されました。今、思い出しても涙が出そうです。

## 私の抑留記

千葉県　綾部嶺男

私は、満州の公主嶺というところで日本軍の無条件降伏を知り、生きて祖国日本へ帰ることができないと信じ、戦友と自決の覚悟を決めておりました。

そのうちソ連軍の進駐により武装解除、「近日中ヤポンスキーは日本へ帰ることができるので安心しろ」の言葉を信じて兵舎に約二カ月収容され、その間大した作業もなく、いつ帰国かと待ちわびていた毎日でした。

十月下旬ごろであったか、「お前たちは帰国できるぞ」とのソ連兵の言葉に、貨車に乗り込み安心と喜びでいっぱいであったが、どうも方向が北の方へと進むので「おかしいぞ」と思いましたら、ソ連領へ入りました。

バイカル湖チェレンホーボ第六収容所に収容された。帰れると思っていた、それが収容所に入れられてはすぐに帰ることはできないであろう。次に強制労働、しかも炭鉱作業という過酷なる重労働を強制され、飢えと寒さに耐え、遠い祖国の山河を思い、むなしい日々を送ったのでした。昭和二十年暮れから二十一年春まで、寒さと食糧不足、強制労働のために数多くの人々が亡くなり、明日は我が身かなと思いました。

やがておそい春を迎えるころにはいくらか気候風土に慣れ、よもぎの野草を摘み、ゆでて食糧不足を補いました。五月ごろより休みの日は月二回ほど素人演芸